

〈研究余滴〉

サブジェクト・ビブリオグラファーとして
～京都大学経済学部を退職して～

細 川 元 雄

私の先輩が「私の体験的書誌学」という立派な書物を刊行され、ご自分の発表論文を集められました。到底これに倣うことは私には出来ません。標題の体験的という感じがこれからここで書こうと思う私の目標です。目標は、資料屋にあるまじき「自伝的エッセイ」になることをお許し下さい。

書いておきたいことは、流れとして、どうして京大へ来て、居着いたのか、つぎに、経済学部調査資料室が経済研究所にそのまま移行しなかったか、このことで、私は、ライブラリアンでなく当時の流行語の「ドキュメンタリスト」を目指しました。最初の仕事といえる「ヒルファディング書誌」を編み、さらに資料屋として「河上肇」に関わり、身分が助手から講師となり、学部で特別講義「経済資料調査論」を担当し、外部の短大の一般教育（基礎）科目「経済学」を講義するという足跡です。今日、「自己評価・自己点検」の時代ですから。

私信を引用するのをお許し願ひ、経済学文献学の先達であり、師と仰いでいるS先生から「いよいよ御退職、長い間御苦勞様でした。調査資料室の充実、ことに河上文庫の設立と育成、経済資料協議会の発展に対する御貴殿は誰しも認める大きなお仕事でした。そのうえ、大学院での経済資料論の講義に先鞭をつけられたことは、とくに重要なお仕事です。この講義が益々発展し、全国の大学に普及してゆくことをのぞんでいます。」と。このお便りに勇気づけられ筆をとることにしました。

1958年4月、同志社大学院商学研究科に修士論文を提出できずに、私は京都大学経済学部調査資料室の事務員として就職し、「サラリーマン」となりました。それは研究者の道を止め、自分では当時のはやり言葉「挫折」ということで、「お金を稼がなければ」という私的な事情にも従って精神的満足を得ていました。昭和30年代のはじめの「時代的狀況」でした。

就職試験であったと思いますが、室長の面接試験の問題が「今日の不況の原因」であり、お金を必要としていた私は「賃金水準の低さ」と即答しました。回答の適否はともかく、調査資料室に迎え入れられました。最初、部屋に座っていると、院生時代に知った京大の先生から、「君、ここへ何しにきたのか」と問われたことがありました。同志社での研究室の延長のような雰囲気、ここに私は結局落ち着くことになってしまいました。しかし、来てから一、二年の間は給料のよいところへと就職試験を受けたりもしましたが、自分に合う稼ぎ口がみつからず、公務員試験中級を合格し、本格的な国家公務員への道に進むことになってしまいました。月給八千円で結婚し、私のアルバイト（家庭教師）代が月給を常に超えていました。

当時の調査資料室は、法経本館3階北東側にあり、助手2名、事務官1名がおられ、隣に総合経済研究所があり、室長の助手が兼務し、女性1名が事務をとっていました。未整理の雑誌が調査資料室の片隅に積み込まれており、私の最初の仕事は、価値判断を含めての整理・保管でした。この部屋がやがて日本の産業分析を目的とした経済研究所に発展的解消するのだ、というのが室長の口癖でした。経営・会計分野（管理会計）を院生の2年間専門としてかじって、「挫折」といって、捨てた筈の目がともかくも継続して、仕事となるに至ったのが、私が居着いた大きな要因です。給料は安い、職が安定していて、時間外はアルバイトは自由、しかもひょっとすると研究所の調査マンになれるかも知れないと明るくなっていました。仕事は本格的に資料収集・整理業務となり、国会図書館の「納本週報」（のち、「全国

書誌」)などを手段に、週に2回は郵送で寄贈依頼状を発送し、さらに寄贈を受けた資料は整理し、配架・保管の業務もこなすことでした。やがて、整理しても置き場がない、…「こんなよい資料があるのに、誰も利用しない」などの問題をかんじるようになりました。問題は、研究所になればすべて解決されると安心して、集め、書架に入れ込む。割合忠実な公務員であり、普通の「サラリーマン」であり、しかも「マイ・ホーム」主義——残業せず、夜飲みに行かず——でした。ウイークデーの夜はほとんどアルバイトで埋まっていました。時代は「六十年安保」も過ぎ、反体制の思想の揺らぎも無関心に過ぎてきた「平凡なサラリーマン」への軌道でした。

二

1962年に経済研究所が学部付置ではなく、大学付置として独立しました。如何なるわけか、調査資料室は学部に残り、室長の助手の方も移られました。やがて私は事務官から助手になり、給料が少し上がりましたが、室としての仕事の目標が薄らぎました。私のアルバイトにも変化があり、国連資料の解説、辞典執筆の下請け、翻訳の校正、高校社会科の副読本の分担などでした。これらは調査資料室の仕事としても大いに役に立ちました。自分の部屋の利用者になることで。この頃若手研究者のゼミナールや研究会にも参加しました。当時研究助手になられたところのN教授のゼミ、今でも私はNゼミの「ゼロ回生」です。また、研究所の助手に赴任してこられたS教授の「日本資本主義研究会」にも加えてもらいました。

1970年代は、学園紛争で始まっています。大学の民主化、職場の民主化という空気は、率直に言って、室と自分が失った目標を自ら選べると思いました。つまり調査資料室助手としての本来的業務を明らかにし、大学の一員としての「個」の確立を主張しなければならないということです。「研究対象は株式会社の内包と外延である」、院生時代に戻ったつもりで、文献ノートをつくりはじめ、「株式会社論文献目録」、さらに「Rudolf Hilferding 書誌」にと、学部図書室や附属図書

館を利用して編集しました。前者はN教授のもとに集められた院生の会で報告し、後者は経済資料協議会で報告し、今日のように深化した株式会社論やヒルファディング研究の先駆けの役には立ったと思っています。サブジェクト・ビブリオグラファーとしての私個人の仕事と言えるものの始まりでした。(本誌第3号参照)

調査資料室として、また経済資料協議会のプロジェクトとしての仕事はここでは省略します。(京大経済学部八十年史、協議会五十年史参照)。組織としての成果が第一の評価であります。もちろん、個人の業績をも私は注目されてよいと思います。京都大学経済学部の図書・資料に関連して、私の仕事が拡大した領域として文献の発掘と学部の歴史にふれておきます。

文献発掘という仕事として二つの事例をあげたいと思います。一つは、後に関わる「河上肇」と、もう一つは「小島勝治」です。「河上肇」との関わりは、学部図書室に大正初期河上が海外留学の前に寄贈した図書類を発見し、当時の図書主任の木原正雄教授によって『経済論叢』に発表されたことから始まり、学部創立50周年に設けられた河上肇文庫の目録編集、1979年の河上肇生誕百周年記念事業、河上肇記念会の世話人、全集編集の手伝いと、本来の仕事から拡大してしまいました。二つ目の「小島勝治」は市井の統計学者で、昭和34年頃に統計学の大橋隆憲教授によって彼の旧蔵書が学部を受け入れられました。彼の文書類を調査し、多くの未定稿があり、それらを経済統計研究会の例会で報告し、そのうち重要と思われる「階級社会の統計学」をおこし、同学会誌に掲載しました(後に小島の著作集に収録)。

学部の歴史に関わったのは、最初は退官教授の著作目録編集の手伝いと戦前の教授の履歴とか、講義科目についての外部からの問い合わせとかでした。本格的な作業は河上肇生誕百年の『経済論叢』記念号に資料として発表した「京大時代の河上肇」でした。その延長のように河上を京大へよんだ戸田海市、彼は今日では「忘れられた経済学者」と言われています。戸田の略伝と著作目録をつくり、調査資料室の室報としてだしました。これらのことから、大学の文書館に関心をいただくようになり、ライブラリアンと異なるアーキビストの役割の重要性をも痛感しました。

三

1980年代になり、「京大時代の河上肇」が河上の全集編集にも役立つのか、全集月報に二度書く機会が与えられ、河上の資料収集と大学院時代のことにふれました。

経済資料協議会の仕事としての中心的な『経済学文献季報』が休刊となっていた時期に、私は会の理事長となり、復刊への仕事がまわってきました。折から情報の技術革新時代であり、全国規模となる「学術情報センター」からの協同事業の呼掛けにのり、『経済学文献季報』はオンラインとしての「経済学文献データベース」として蘇り、ハード版も復刊することができました。

1986年に私は助手から講師に昇任しました。当時大学入試制度改革、大学内のカリキュラムの改革など一連の大学改革のはじまる時期であり、経済学部はいち早く新入生に「経済学概論」と1回生ゼミナールの試みが実施されました。この概論の1コマとゼミを私は担当しました。また図書室で毎年度はじめにおこなわれる「図書・資料のガイダンス」をより専門化して、大学院生向けの講義とすることが当時の教科主任より提案され、講義科目「経済資料調査論」が生まれました。この種の講義は全国の大学では存在しません。ある機会を得て、私は経済学教育学会に入会し、この講義について報告、報告内容を学会報に掲載しました（『経済学教育』第11号）。

なお、退職後は、非常勤講師として「特別講義 経済資料調査論」を続けています。また短大の「経済学」も。さらに、経済資料協議会では個人会員としてビブリオグラファーの育成にささやかでも貢献したいと思っています。

最後に、決意として二つの送別会での私の挨拶を録しておきます。一つは、1996年3月22日経済学部教官の送別会です。

研究教育者としての立場から、二つのことにふれ、感謝の言葉といたします。一つは、教育者としての喜びであります。池上学部長時代に一回生向きの「経済学概論」と一回生ゼミが開講され、私もそれに加わえられたことです。その時の七人の学生がその後も自主ゼミとし

て、四回生まで続き、卒業後も結婚の媒酌人を果たすということなど一般にいわれる「教師冥利」にあずかっていることです。退職を前に、先日も新婚夫妻、フィアンセを連れた彼らがお祝い会を開いてくれました。こうした機会を与えて下さった学部教官の皆さんに深謝いたします。もう一つは、私はライブラリアンであり、アーキビストであるということから何か言うことができますが、リサーチ・ワーカーとしてはそのオリジナリティを主張することはできません。この立場からは、これからの私の決意として、残された日に賭けたいと思っております。姥櫻、これは差別用語かもしれませんが、ここではお許し戴いて、もう春です、櫻になぞらえて話します。櫻は実生から30年でようやく人に見てもらえる木になります。60年もすると、その社会的存在は少なくとも皆さんに感じていただけます。姥櫻は木はしわくちゃでも、小さい、ほんとうに美しい花を咲かせます。たとえそれが一輪でも、凄いい魅力をもっています。私のリサーチ・ワークもそうありたいと思っています。

二つ目は、職員組合経済学部支部の送別会です。

京都大学経済学部職員組合の組合員を去るに当たって、一般的なお別れの言葉を言うことは割愛させていただきます。まず、組合員でなくなることに大変嬉しく思っています。一種の解放感です。私の大学生時代は、「血のメーデー」にはじまり、火炎ビン闘争、六全協と、こうした時代にマルクス主義を勉強してきました。サロン・マルキストだの、日和見主義だのと実践を嫌う者としての批判を甘受しなければならなかった。その後今日まで、自分なりの世界観、人生観に「日本マルクス主義」が色濃く関わっています。京大に来て、多分組合の懇親会であったでしょう、「挫折」という発言をして、「どれだけのこと（運動）をやったのか」と再度批判を受け、積極的に受け止めることはせず、日和見を今日まで続けてきました。このことが私の運動論に対する一種の重荷（うしろめたさ）とすれば、今日はそれからの解放感であります。明日から今の戦術論や運動論にこだわることなく、自分の哲学を今後は主張していきたい、そのために勉強します。

1996年4月3日 記

2000年11月3日 加筆